婦人と新社會

山田わか主筆

九月號

フランクリンと鍛冶屋

逆な不具者と其の矯正

消費組合の綱領と經濟學者の批評

グラスゴー及びリバプール ニュース

佛蘭西に於ける修理事業◎獨逸が支拂つた金額◎婦人代議士增加◎ウイルソン元帥の未亡人◎女優の慘狀◎母態と職業◎失業問題

婦人の新職業

職業婦人と結婚

英國一周◎歸省

每月一回一日發行　第參拾壹號　大正十一年九月一日發行

東京[illegible]婦人と新社會社發行所

婦人と新社會

九月號

フランクリンと鍛冶屋

或る日、フランクリンは波止場を通つて、其處に、鯰や鰻を釣らうとして居る青年を見かけました。其の青年は優れた腕の鍛冶屋であるのをフランクリンは知つて居るので、聲をかけて云ひました。

「トムよ、お前はつまらないことをして居るね。銀の魚針で魚を釣つたら、よさそうなものだのに。」

けれども、青年は答へました。

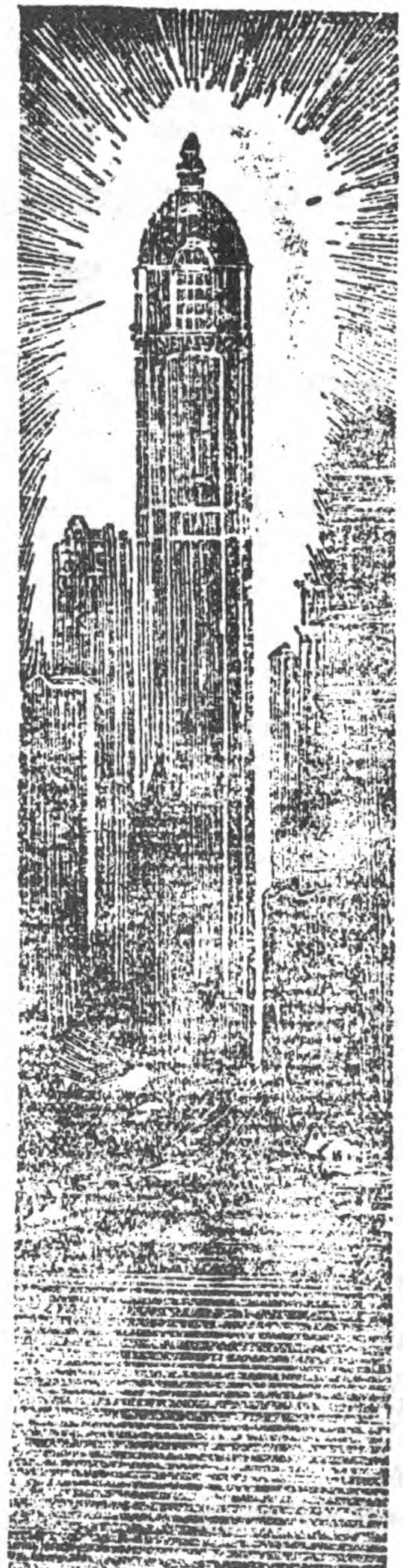
「銀の魚針なんど、私には持てません。」

それから、暫く後の或る日フランクリンは、又、長い釣竿を持つて水の上を眺めて居るトムを見ました。

「トムよ、お前は、まだ、銀の魚針を得ないのか？」

「何と仰有います？　私は銀の魚針を買ふのがやつとです。」

「まア、まア、何を云ふのだ！　うちへ歸つて鐵床へ向ひなさい。さうすると、お前が此處で一ケ月かゝつて釣るよりも、もつと澤山な、そして、上等な魚を買ふ程の銀が一日で得られるではないか。」



逆な不具者と其の矯正

或る日、ザラサストラが大きな橋の上を通りかゝた時に、不具になつてゐる乞食の群が彼を取り卷きました。そして、其の乞食のうちの一人なる傴僂（せむし）が彼に何か質問しました。其に付て、ザラサストラは答へました。

「目が片方見えなかつたり、耳が片方無かつたり、片跛であつたり、舌が無かつたり鼻がもげてゐたりすることは何でもないことだ。此の世の中には、もつと〳〵恐しい

困ることが澤山ある。つまり、世の中には、餘まり大きな一つのものを持つて居て、外のものは何にも持つてゐない人が澤山ある。たとへて云ふなら、或る人は目ばかりの人間である。大きな〱目を持つて居るだけで、外に何も持つてゐない。或る人は又、大きな口を持つて居るだけで外に何にも持つて居ないし、或る人は、大きな胃袋ばかりの人間であるし、とにかく、世の中には、さう云ふ風に一つだけを非常に大きくして持つてゐて、外に何にも持つてゐない人間が澤山あるのだ。そして、私はさう云ふ人間を逆の不具者と呼んでゐる。さう云ふ恐しい大きな不具者と比べて見るなら目が一つ無かつたり、耳が片方取れてゐたり、鼻がかけて居たりすることは何でもないことだ。

「私が最初、不圖、或る耳ばかりを見た時に、私は自分の目を疑つて、幾度も〱其れを見直して見た。けれども其れは矢張り耳であつた。人間の大きさと同じ位、大きな耳であつた。猶も注意深く眺めて見ると、其の耳の下に憐れに小さい、細い莖狀の

ものが動いてゐた。實に、其の耳は其の細い莖狀のものの上に鎮座して居るのであるが、其の莖狀のものが人間の體だつた。眼鏡をかけて猶も精細に見ると、其の莖狀のものには、嫉み深さうな顏が喰付いてゐるし、又、浮腫(むく)んだ心靈もぶら下つてゐた。

「其れにも拘らず、人々は、私に向つて、其の大きな耳は唯に人間であるばかりでなく、大人物、大天才だと云ふ。けれども、私は決して其の人々の云ふことを信じない。そして、私は、何處までも自分の信じた通りを云ふ。あれは逆な不具者、つまり、たつた一つのものを餘まり發達させて居て、外の凡てのものを皆失つて居る、と。」

かく、ザラサストラは傴僂と、それから、傴僂の仲間である乞食の群に云つた後に同行して來た門弟達を振り返つて、そして、非常に憂鬱な顏をして云ひました。

「私は、右往左往して居る人々の中を歩いて居る時に、丁度、人間の缺片や、手足ばかりの中を歩いて居るような氣持ちがする。これは實に恐ろしいことだ。戰場か、又は屠殺場を歩くように、人間の體が切れ／＼になつて、離散して居るのを見るのは、

實際耐へ難いことだ。

「併し、この狀態は、現在に於てばかりでない。過去に於ても、同じだつたのだ。人間の缺片と手足と、そして、恐るべき衝突があつたばかりで、人間らしい人間と云ふものはなかつた。

「此の地上に於ける、現在と過去、何と云ふ慘憺たる有樣であるだらう。これは、到底、私には我慢出來ない事實だ。であるから、もし、私が、將來に希望を置く、未來を見ると云ふ目を持たなかつたならば、私は、どうして生きて行くべきかゞ分らなくなるだらう。

「未來を見る人、目的を持つ人、創造者、未來、そして、未來への橋――ああ、けれども、此の橋の上の不具者のようでは！」

と云つた、ザラツストラの言葉から、私共の生活の意義其の使命は過去から未來へ迄の橋であると云はれてゐます。そして、其の橋を造る處は學校である。否、むしろ

不具者ばかりである過去から、完全な男女が住む未來へ迄の橋が學校であると云はれてゐます。

人々が皆專門的な仕事を目的に勉强したり、專門的な仕事ばかりして居つて、全き人間としての修養を怠つて居るならば、人々は皆人としての不具者になつてしまふ、そして、世の中は、いつも、渾沌としてゐて、人々は五里霧中に迷つて居なければならないと云ふのです。

物知りは廣く物事に付いての知識を持つて居るだけで實行の能力がないし、藝術家は音や色の外は何にも見へないし、醫者は此の人生を病理的にばかり見て行くし、商人は物品に關する知識ばかりを持つてゐて、儲けることばかり考へて居るから、こう云ふ人ばかりの社會に不幸が多いのは、むしろ、當然だと云ふのです。商人は、大抵の場合、どう云ふ行爲が社會の利益になるか、害になるかの見分けが付きませんし、普通の職業に從事して居る人は、教育の原則が何であるか、政治の使命は何であるか

と云ふことの觀念さへも持つて居ません。ですから、講演とか演說とか云ふものが聽衆の贊成を受けるには、其の內容は何であれ、相當な音聲に熱を加味しておもしろくいゝゝしやべりさへすれば、必ず成功すると云はれて居ます。

現在の人々は、皆專門化しつゝあります。皆自分の受持ちの仕事に關する知識だけを持つてゐて、全體としての人生に付ては全く無知で居ります。そして、それだけでは此の社會は成り立たないのであります。凡ての方面に働く人が相互に了解し、同情しあつて、そして、共通の目的を持つて居てこそ、國家的に能率は上り、國家としても、個人としても健實であるのです。

合衆國、オハイオ州のアンテオク大學では其の點に氣付いて一つの計畫を立てました。つまり、別々な部門の課程を踏んで居る凡ての生徒の間に連絡を造り、あらゆる方面に發達した能力の糸を一箇所にあつめ、人間の可能力を現す立派な織物を織り上げようとするのです。そして各生徒は各自の志す專門の方面に努力して居るのである

けれども、併し社會は常に共同と云ふことを重んじなければならない。學者であらうが、貴族であらうが、商人であらうが企業家であらうが、皆共通の感情、共通の意志を持つて居なければならぬと云ふことの訓練をするのです。

今日の私共の生活は社會的に經濟的に共同と云ふことが特色です。一日も一時間も單獨に生活して行くと云ふことは不可能になつて居ます。ですから、私共は、皆、自分の專門の仕事にかゝはつて居て、其の熟達に勵むと同時に、社會萬般の事柄にも通じて居なければならないのです。男でも女でも、此の社會を全體として見る目を養ひ、あらゆる方面に於ける、人間の經驗の根本的意義を掴んで居なければならないのです。

其の根本的意義を掴んで居るならば、それ〴〵別な方面に於ける活動に効果あらしむるやうに、私共は私共の行動を取つて行くことが出來ます。共通の意志、目的の一致がどの位ひ有力で有効であるかと云ふことは戰爭中、凡ての國が經驗して居る事實

です。

文明的社會は、社會萬般の事柄に通じて居る男女が集合するのでなければ成立しません。人生に於けるあらゆる關係を廣く眺め、考察する能力があつて、そして、少なくとも、國政を委ぬるために適當な人物を選み得る聰明さがなければ、文明人とは云へないのです。そして、選まれた人物も、亦、自分の專門の事柄に關してばかりでなく、一般の關係を熟察した上に、自分の專門の仕事を其處に適應させて行かなければならないのです。

で、アンテオク大學は、前述の意味の新人を養成するための企てを立てたのです。其處に中心を置いて、人格の發達と社會の幸福の增進を計らうとしてゐます。

つまり、ザラサストラの云ふ切れ〲な人間、又は、逆な不具者を造らない計畫なのです。云ひ直せば、一個人、一人格者として釣合ひの取れた人物を造らうとするのです。

そして、其の實行方法はと云へば、先づ、第一に、想像力を養ふのです。目前にあるもの、つまり、現在を越へて向ふを見る習慣を養ふのです。第二には、信仰と希望を生徒に持たせるのです。信仰と希望とは、いつも勇敢に未知の世界に突進して行く原動力です。信仰と希望だけでは直接には何等の價値をも創造しませんが、併し、信仰と希望は價値を發見します。人間は其の内部に無限に有益な富源を蓄へてゐます。周圍の狀態に阻まれて、發達することの出來なかつた有益な力が潛んでゐます。ですから、聰明な熟練した人によつて、信仰と希望を吹き込まれ、導かれるならば其等の眠つてゐる能力が皆目覺めて來ます。

一體、敎育が狙ふ處、目的とする處は一つです。つまり少年男女、及び、靑年男女が所有するあらゆる方面の能力を發達させ、先人の經驗を利用させ、人間と人間との關係を見得るようにするのです。

とにかく、アンテオク大學は、たとへ、少數でも、新社會の要素となる人物を造る

ことを主眼としてゐます。知力に於て、精力に於て、意志に於て、友情に於て、新しい精神の發現を目的としてゐます。ですから、同校を出る時には學課の成績の優劣に拘らず、其の精神が體得出來て居なければ落第生と見なされます。

そして、社會に出てからも、どう云ふ方面に其の位置を得ようとも、自分の周圍に其の精神を普及するのが第一の義務なのです。そして、唯、金を儲けるための仕事はいさぎよしとしない。一體、人間の仕事で最も高尙なのは經濟に動機を持たない仕事なのですが、併し、今日の社會狀態では其れは望むべくして行はれない、そして、一般人は經濟的の動機によつてのみ動かされて居るものですから、せめては釣合の取れた教育法によつて、其の弊を矯めて行かうとするアンテオク大學の方針は、參考とするに足るものだと思ひます。



消費組合の綱領と經濟學者の批評

チャーレス●ジード

消費組合の直接の目的は、その會員達に現在の制度に依てよりも、より滿足的に、より經濟的に物品を供給する事であります。例へば、その必要品が麪麭であるならば麪麭製造を營業としてゐる人から供給されるよりもよりよき品質、より正しき目方より低廉に提供しやうとするのです。併し其の希望が遺憾なく實行されるものであらうか？　實際、これは一見甚だ冒險であるように思へます。何故なれば、全く專門家でない、單なる消費者が、麪麭營業者よりも、よりよき品質の麪麭を製造し、より低廉に供給したり、本職の人達よりもより安い給料でより忠實に其の業務にたづさわることが出來るかどうか？　且つ、又、それは勞働の分業及び交換の大法則に矛盾しては

居ないだらうか？　或ひは、又、それは、野蠻時代の生活に歸へるのではないだらうか？　ロビンソン●クルーソーの生活のやうな生活に、或ひは、又一家族の凡ての必要品は一家族の勞力に依て滿して居た封建時代に戻るのではないだらうか？

と、云ふような、反對論を經濟學者は保持してゐました。併しながら、過去半世紀間にこれを試みた凡ての國が得た經驗、及び、その間の無數の成功は、この消費組合員の要求が確立された事を證明して居て、最早それに對しての議論の餘地はなくなつてゐます。

實際に於ては、協同事業に對する專門的才能を持つた人の缺乏、及び、手腕ある管理人、つまり監督眼を持つた人物の缺乏から、協同事業は、まだ、不利の地位に置かれて居ることは事實です。且つ、又、この管理人は俸給を取つてゐる人であつても、又は、無給の慈善家であつても、とにかく、自己の利益と云ふ刺戟を缺いてゐると云ふことも事實です。

けれども、消費組合は、單なる協同事業とは異り、只、會員の必要品を供給するのが目的ですから、これは、確實に實行出來ます。殊に會員がその組合の店から買ひとる事に於て正しく且つ忠實であるならば、それだけ仕事は確實です。組合は投機をしたり、損をして賣らねばならぬやうな仕入方をする必要もないのですから。其の上に消費組合は贅澤な建物をかまへる必要はない、何故ならば、それは公告する必要がないから。從つて債務に苦しむこともないし、又、通常、掛賣をしないために、普通の商人の最も重き負擔とする二つの費用が省かれます。

消費組合は、又、資本家の事業に於てよりも、より低廉なる俸給で、職務に忠實な獻身的な、能力のある管理人を得る事が屢々あります。英國消費卸賣組合の前管理人の一人なる、ジエー・テイー・ミッチエル氏は米國の經濟學者、グラハム・ブルック氏の「どうして貴方はかゝる僅かの報酬を持つて滿足して居るか」と云ふ問ひに對して「自分は同僚に尊重されて居る事を以て喜びとして居る。又、自分には相當の力があ

ると云ふこと、この消費組合の理想に大いなる信仰を有つて居ると云ふこと、之等が自分を滿足させる』と答へて居ます。斯ふ云ふ方法に依て、消費組合は經濟上及び產業上に所謂私慾のない公平な一つの新しいそして甚だ有力なる精力を齎します。

之等の要素は、經營者の無經驗から起る、不利益を補つて餘りがあります、そして商人に對抗しようとする處からも、組合に利益を與へて居ます。實に普通一般の人の考へに反して、普通の商人の間から起る失敗以上の失敗を消費組合はしてゐません。消費組合の方が確かに失敗の數が少ないと云ふ事を統計にとつて示そうと思へば示すことが出來ます。

消費組合組織は勞働の分業を廢止し、そして各人が各自の必要品を造り出さねばならなかつた元始時代に立ち歸るのではないかと云ふ疑問に關しては、若し人が消費組合を一つの大きな家族と見るならば事實それに違ひありません。昔の家族がして居たように、又、現今に於ても或る農家などで行つて居るように、彼等は麵麭もチヤムも

造り、糸も績ぎ、布を織り、洗濯其他一切をして居ます。

けれども、消費組合に於てはさうするには違ひないが、併し、消費者各自が其の仕事の全部をするのではない。矢張り、それ〳〵の專門家に委ねるのです。そして、若しその專門家が會員ならば、尙好都合です。もし、分業と云ふことが、經濟的見地から廢止されべきものであつても、併し、それを工藝的見地から見るならば、其處に進歩を保證する充分な力があります。

人は云ふかも知れません、消費組合は、現在既に人類間に存在して居る隱れたる協同力を、有識に組織し、變形するに過ぎないと。そして、各個人の行動は如何にせば自然に一般の調和となるか？　不幸にして、この調和は實現されず、度々恐ろしい不調和に終つて居ると云ふ事實を擧げて、經濟學者は、それを得意の論題としてゐます處で、この消費組合の役目は、其の不調和を救濟し、各人をして一つの調子に從つて働かしむるのであつて、つまり、奏樂隊の指揮者の役目であります。

私共が今、消費組合の特色として、指示した作用、則ち凡ゆる生活必需品を最も經濟的に滿足的に供給する事は、今日に於ては世界の到る處に於て多數の組合に依て行はれて居ます。尙又、組合は組合自身の力を以て其の組合を經濟的進化の最大重要なるものとなす事も出來ます、そして、常に增加しつつある支持者を、單に生命を支へる丈の賃銀取りなる勞働階級からばかりでなく、中產階級から、官吏から、事務員から、或ひは其外贅澤品の膨脹に依る生活費の增加から苦しんでゐる人からも、增稅其他による收入の減少から困難して居る凡ゆる人々から、組合の支持者を得る事ができます。

この組合運動が進步して居る各國に於ては、若し組合員の大多數がその組合から單に生活向上の手段を得る事のみを求めて居るとしても、その中の少數は、この組合からより最上のものを、則ち、經濟的關係に於てのより偉大なる正義に致達する事を求めて居ます、で、ロッチデールの織物工達が彼等自らを公平實現の率先者と稱したの

は無意義な事ではないのです。彼等はその組合から、貧者の爲により多くの慰安を求める事に於て滿足して居りません。彼等は交換の範圍に於てばかりでなく、製産と富の分配に於て經濟的變化を齎すべき手段を見出さうとしました。もと〱競爭を基礎とした產業組織の富の分配法は、最も、不安定な恐らく住居するに適せぬ建物のやうなものであるに相違ありません。尙、又、彼等は、この企業から得る凡ゆる利益を組合員全體に、公平に、分配する方法をも發見しやうとしました。彼等の組織は富の分配に對する新組織の開始でありました。それは、資本は最早利益を得るものではないと云ふことを明らかにしたのであります。故に、消費組合の目的は會員相互の助力に依て、つまり昔の家族組織の如きものに依て資本主義を打破すると云ふ事を意味します。

消費組合が生れると、それに附隨して道德上の進步に對する希望が生れます。經濟的活動の只一つの實際的動季である利を追ふ事を止め、それに代ふるに必要品を充た

すと云ふ單なる目的を以てし、同時に廣告、虚言、詐欺的行爲を廢止し、濫費させようとする勸誘を止むる故に、消費組合は、その事業に於て眞の正義を確立せしむる事が出來ます。換言すれば正當な市價を定める事ができるのであります。で、若し、私共が二つの言葉に於て、組合の目的を定義しやうとするならば『公平な値段（フェーアプライス）』と云ふ言葉が、充分に其の意味を表示してゐます。經濟學者は云ひます。さう云ふ方法で公平な物價を定めようとするのは非科學的である。何故ならば消費組合であらうが、又、それが、國家であらうが、公平な値段を定むることは出來ない。公平な値段を定むるものは、唯、需要供給の法則として知られてゐる經濟的要因のみであると云ひます。

物價の安定と云ふ事は商業上、産業上、より熱心に求められてゐる目的であつて、彼等は競爭に因る物價の動搖を防止しようとしてゐます。さう云ふ理由から、定められた物價が大市場を支配して居ます。そして製造家は自己の商標ある製品を定價にて販賣する事を商人に強要し、その定價以下にて販賣する事を禁じてゐます。「物價維

持」と云ふ名目の下に廣く米國合衆國に於て行はれて居るこの組織は未だ佛國に於ては化學者間の特許藥品、及び、出版業者を除いては、殆んど、見ることの出來ない現象です。

併しながら、其のようにして定められた物價は消費組合の『公平な價段（フェーアプライス）』と共通な處が何にもありません。組合の定價は利益を減少するに反して、商人の定價には利益が其の要素となつてゐます。ですから、その組織が一般的であるならば、消費者は全々製産者の意のまゝになつて居なければなりません。それが則ち、消費組合のよつて起つた理由です。物價は規定されますが、併し、それは消費者に依て規定され、その定價以上に賣る事を禁じられてゐます。

其處で如何なる方法をもつて、消費組合を發達させて行けば、前述のやうな大きな結果を得る事が望まれるかと云ふことに付ては、追々話して行きますが、今直ちに言ひ得ることは、斯ふであります。組合の利益の全部か、或ひは一部分を組合のものに

するか、或ひは少くとも組合の名で貯金することを各組合員に承諾して貰ふのです。そして、その集まつた資金を以て、工場を造り、土地を購ひ、家を造るに用ゆるのです。そして其處から來る利益を組合の資本とするのです。

かくして、組合は今迄資本家の手に單獨に這入つて居つた利益を少しづゝ吸收するのであります。それは既に資本家の手にある資金を奪ひ取るの問題ではなく、勞働階級の爲に新たに資本を造らうとするものであります。と云ひますと、社會主義は既に勞働者の賃銀が彼等を支へるに不充分であるのに、如何にして其處から新たなる資本を引き出し得るかと云ふて嘲笑します。併し、彼等は凡ゆる資本は過去の勞働の產物であると認めながら、何故に同じ努力を費し、同じ資本を造り、勞働者自身の爲に其の資本を保存すると云ふ、この新しい仕事を認めないのでせうか?

若し勞働者が古い資本を維持する事を止めて、彼等自身のものであるべき新しい資本をのみ使用するやうになるならば、古い資本は漸々と無用な、丁度、蝶が飛び去つ

た後の繭のやうなもの、穴つぼうな物となります。

この理想が實現されるのは前途遼遠である事、及び、消費組合が商業上の慣習を多く改革して居ない事を私共は認めて居ます。賞與の追求――英國人はそれを配當狩りと呼んで居るが――それは利益狩りと比較して其の鋭さに於ては決して劣つて居りません。そして、最惡な實業界の弊、つまり、不正なる口錢の如きものが盛んに授受されるやうな社會すらもあります。そして、さう云ふ社會は、消費組合が其の狀態を改革すべきであるにも拘らず、却つて、其の口錢のために誤まられてゐると云ふ傾きがあります。組合員が組合に對してさう云ふように不忠實である場合があるにも拘らず組合は、同じように、其の高尙なる理想、並びに、實行的な特色を著しく保持して居ると云ふのも事實です。

人は、屢々、稍、專門的な言葉で此の問題が論ぜられるのを聞きます。即ち、此の消費組合は、目的であるか、或ひは、手段であるか？と。何故なれば、所謂中產階

級の組合と稱される組合運動に集合する大多數の人々は只一つの手段を得るのが目的です。つまり、より多くを費やさずして、より豐富な生活をしよう、克已せずして貯蓄を續けやうとするのですから。或ひは、又、共産主義者、及び無政府主義者ら此の消費組倉を一ッの手段としてゐます。つまり消費組合をして、其の主義を實現するための手段としようとするのです、階級戰の準備として、人々を訓練し、或ひは、用意をする。つまり要塞、及び、軍需品を造り、專門的の訓練をして置いて、一朝大革命の起つた場合には、彼等をして、製產と分配の役目を充分果し得るやうに爲そうとするのです。

併し乍ら、組合自身の爲に組合を愛してゐる眞の組合員にとつては、組合はそれ自身に於て目的であります。彼等は、既に、到達し得た、狀態を以て滿足して居るばかりでなく、彼等は組合を有機體と見てゐるので、未來に多くの希望を囑し、そして其の希望實現の可能性を信じて居ます。

丁度、種子には外界には見へないけれども果實が、含蓄されて居るのを信じてゐると同じように。云ひかへれば眞の組合員は、組合の爲に規定した法則に從つて居る各組合を、正義と、社會の利益とに適合して組織された小さな世界であると信じ、そして、その發達に依つて、又は模倣に依つて到達し得べき最高な世界を早晩實現し得ると信じてゐるのです。

斯う云ふ社會革新に對する主張を潮笑する經濟學者に答へて、人は云ひ得る。此の運動は、經濟學者の稱へた原則の一つを實現しやうとして居るのである、と。つまりパステートが『經濟學は消費者の見地から扱はれねばならぬ』と言つた。その言葉を實現しようとするもので、云ひ直せば消費組合の綱領は經濟界に於ては、消費者を主權者の位置に置かうとするものであります。

實際に於て、與論は、殊に保護貿易主義者、又、社會主義者は、製産者は消費者よりも、遙かに經濟的に有益で道德上からも貴きものと考へて居ます。その理由は製產

者は常に他人の爲に物を造るが消費者は常に自己の爲に或ひは自己の利益の爲に物を費す故に、製産者を消費者の犠牲とする事は不善であると云ひます。併しながら、現在の經濟組織に於て、製産者が他人の爲に存在して居るなどと云ふ事は徒らに言葉を弄するものであります。若し麵麭燒が麵麭を製造しても、それは、他人を養はふとするのではなく自己を益さうとするのであります、そして彼が他人を養ふたとしても、それが彼にとつて唯一の儲け得る手段なのです。ですから、消費者本位の産業組織は唯、此の消費組合のみであります。實にそれは製産者を犠牲にするのでもなく、又消費者を犠牲にするのでもなく、其の兩者を社會の適當なる地位に置かうとするのです。

併し乍ら製産者が消費者の利益の爲に存在して居ると云ふのは事實です。麵麭製造人が饑じい人々の爲に存在して居るといふ事は明白な事實です。けれどもこの眞理が實際の經濟組織のうちに、餘まりに度々、誤まられてゐるので其處で消費者組合の組織が必要となるのであります。



グラスゴー及びリバプールニユース

七月號には桑港ニユースを書き、八月號には紐育ニユースを書きましたから、山田嘉吉氏の旅の順序では本號には倫敦ニユースの一欄を設ける筈でした。けれども、倫敦の新聞は四六時中來て居りますので、そして、取り立てゝ書きたいものもない處へ、嘉吉氏はスコツトランドのグラスゴー・ヘラルド紙とリバプール・デーリー・ポスト紙を送つて呉れました。其のうちから次の記事を抜きとつて御紹介することに致します。

佛蘭西に於ける修理事業

佛蘭西の工部大臣は、五個の大團體を組織し、大規模に修理事業に取りかゝる計畫を内閣々議に於て說明した。佛蘭西人の技師が指揮して獨逸の勞働者を使はうとするのである。リヨンの團體だけでも一萬二千人の獨逸勞働者を使用して十年繼續しようとするのである。けれども、此の計畫が佛蘭西の議會へ付される前

に、詳細に付て、獨逸との多くの商議が必要であらう。

獨逸が支拂つた金額

佛蘭西の大藏大臣は、下院よりの質問に答へて、獨逸がヴエルサイユの條約により、今日迄に、聯合國に支拂つた金額を發表した。（數字の單位はマルク）

一、四二六、〇〇〇、〇〇〇（金貨）
二、九五八、〇〇〇、〇〇〇（物品支拂）
合計　四、三八四、〇〇〇、〇〇〇
聯合國ライン駐屯費
五六〇、〇〇〇、〇〇〇
總額　四、九四四、〇〇〇、〇〇〇

婦人代議士增加

スコットランドの有名な婦人警部アイヴイ●ニスベット夫人は此度エデンバラから押されて立候補を宣した。夫人はエデンバラの人である。そして有名な雄辯家である。婦人及び子供の利益に對する夫人の獻身的な態度が、婦人團體の熱心な後援を豫期せしめてゐる。どの政黨とも無關係に獨立で打つて出るので、國民婦人參政權同盟會エデンバラ支部が夫人のために牛馬の勞を取ることになつてゐる。又、キヤソリック教徒の中からの始めての婦人立候補であるために、選擧費が既でに彼等のうちに集められつゝある。

ウイルソン元帥の未亡人

アイリシ人に暗殺され、全英國民に哀

悼されて居るサー●ヘンリー●ウヰルソンの未亡人は、良人の死によつて空席になつた議席を占むべき候補者として、ノース●ドーンから押されるらしい噂がある。夫人は、有力な政治上の意見の持主として知られてゐる。

女優の慘狀

一合瓶の中へ、五合の酒は這入らない則ち、全英國の凡ての劇場が開いて居てそして、繁昌して居ても、凡ての俳優が使つて貰ふことは出來ない程、英國には俳優の數が多いのだ。其の道の或る人の話に、普通若い女が本當に有効に舞臺を勤め得るのは、つまり、職業としての女優の生命は三年位ひのものだ、と。そして、女優にとつて最悪なことは其の生命が短いと云ふことばかりではない。所謂成功したと云はれて居る一流の女優でも始終、仕事があるわけではないから、二流三流處の女優の境遇は押して知るべしである。

女優として天才的の一人の娘が去年現れた時には可なり世間の注目の的となつたので、未來が囑されて居たが、併し、彼女の人氣を煽るための批評が充分でなかつたゝめに、十二ヶ月間に彼女が舞臺に出る機會は三晩しかなかつた。

皮肉なことは戰爭中、合唱隊に加はつて行つた女中が幾人かあつたが、今、彼女等は皆失業者となつてゐる。

母態と職業

活動界の女王、メー●マーシは、今度有名な『情火』の一篇の主役を勤めるために合衆國加州から倫敦に來たが、彼女は妻として、母として、家庭の主婦として、模範的の婦人であるとして英國に於て、評判されてゐる。彼女は小さい娘のメリーとの外は遊ぶ時間を持たない。又、彼女の唯一の道樂は料理である。今度、倫敦へ來るに付ても、赤子のメリーは、勿論、良人なるルイス●リー●アームス氏が一緒に來て居る。アームス氏は亞米利加の有名な物語り作者である。

マーシ夫人は云ふ。『私は子供をうちへ殘して旅に出ることは出來ません。そして、私の良人も一人殘されるのを嫌やがります。ですから、私共は出るなら一家族揃つて出ますし、うちに居るなら一家族揃つて居ます。』と。で、夫人は、子供のために庭園のある家が欲しいと云つて演劇の合間々々には頻りに家探しに歩いて居るので、もし、凡ての母がマーシ夫人のようであつたら、兒童愛護の宣傳などは必要でない。婦人の職業と母態とは平行し得るものであると云ふことの證據が必要であるとするならば、マーシ夫人の生活は其の有力なる證據であると評判されてゐる。

失業問題

リバプール婦人市民協會（ウイメンセテズンアッソシエーション）は七月六日夜『失業問題』に付て協議した。そして、重なる發言者はエレノーア●ラスボン女史であつた。女史は英國母性保護調査會の委員である。女史は曰ふ。

『現在の失業問題を解決するには、先づ第一にヴエルサイユ條約に修正を加へなければならない。則ち、少なくとも、經濟上の條項を改正しなければならない。復興費をもつと正當な額に引き下げ、聯合國間に於ける戰事中の負債を棒引きにし、爲替の相場の動搖を防ぐようにしなければならない。

『英國の貿易は、外國の購客を取り返へす迄は決して以前の狀態に復すことは出來ないが、併し、今日のように、歐洲の半分が荒廢してゐて、渾沌として居ては其の購客を取り返へすことが出來ない。又、國民にかゝる重税は產業の復興には重大なる障害であるからして、これは減縮しなければならないが、併し、さうするには、思ひ切つた軍縮を實行しなければならない。』

と云つて、それから、現に、英國に於て、此の難問題解決のために適用された種々の計畫を評論した。一體、英國には强制保險なるものが設定されてあるが、其れに付て、女史は曰ふ。

『此の保險制度を、たとへ、戰爭中でも戰爭後でも、もつと廣く應用して置いたならば、今日のやうに失業問題に苦しみはしなかつたらう。』

又、男女間の競爭に付ては

『現在に於て、失業者となつてゐる婦人の多くは家庭的の仕事に對しては、全く無能者となつてゐる。が、とにかく、男勞働者に仕事を授けるために、女勞働者を解雇した處が、其れが解決になりはしない。本當の解決は、產業を盛んにし、又各勞働者の能率を高くすることである。』と。

婦人の新職業

今日に於ては、保守主義者であれ、革命論者であれ、有產階級であれ、共產主義者である、無政府主義者であれ、新敎徒であれ、舊敎徒であれ、その目的の詳細には差異があるとしても、皆、協同の必要、消費組合組織の必要を說いてゐること。又消費組合を組織するならば、市價よりは底廉に物品を分配する事が出來るし、或ひは、又一般の取引き價格で物品を分配するとしても、それは、より以上に滋養を含む食品、より以上に長持ちのする衣類を分配する事が出來るし、又、パン肉或ひは其の他の凡ゆる物品は、正確な目方から來る量に於ての增加と云ふ利益をも得ることになると云ふこと、そしてこれが社會衞生の基礎になる、結核病減退の要因となると云ふことは、本誌八月號の『消費組合の目的』のうちにありました。

一方では、こう云ふ風に、製造人と消

費者との間を出來るだけ、接近させよう仲間人を一人でも少なくしようとする運動が、世界を通じて烈しくなつて居る今日、他の一方には、今日迄に存在して居なかつた職業が出來ました。つまり、製造人と消費者との間にはさまる新しい職業が出來たのです。そして、其れは『買物歩き』と云ふ婦人に最も適した職業です。

一體、買物歩きと云ふことは、今迄は婦人の娯樂の一つでありました。けれども、あらゆる文明國を通じて婦人の生活が日に月に忙しくなつた結果、多數の婦人にとつては其の買物歩きが一ツの苦痛になつてゐます、且つ又、時間が充分あつて、品物をよく吟味して買ふならば價格も相當に安く、そして、氣に入つたものが買へるのに、時間がない結果は、氣にも入らないものに高價を拂つて買はなければならないと云ふ不便があります。其處で何事にも機敏な米國に於ては、其の不便を補ふため一ツの職業が出來たのです、つまり、買物歩きを職業とする婦人が出來たのであります。

此の職業を始めた人はジユリアン●バンウエル孃と云ふ若い婦人ですが、彼女は生れた故郷に一生を埋もれさすよりも大都會へ出て何にかして見たいと云ふ希望を持つて紐育へ出て來ました。けれども、その厖大なる、目まぐるしいような大都會に知己が一人もないのに困つてしまいました。で、彼女は、不圖、思ひ付て、故郷の知人の全部に書面を送つて、

大小に拘らず、買物を自分に依頼して呉れ、どんな便宜でも計るからと云ひ送りました。

さうして、故郷の人々のために買物をしては郵送しつゝあるうちに、其の仕事の範圍はだん／＼擴がつて行つて、購客は地方にも市内にも澤山出來るやうになつて、僅か二年の間に多くの部下を指揮して大規模に市内外の購客の便宜を計るようになつたのです。

其の方法は、たとへば、私が、事務服が欲しいと思ひます。或ひは子供の洋服が欲しいと思ひます。すると、私は何處へ行けば格安でいゝものが買へるだらうかと考へる代りに其のジユリアン孃の事務所に端書を出すのです。勿論、寸法を書き添へて、すると、其れなら何處へ行けば一番安く、一番いゝものが買へると云ふことがその事務所には明瞭に分つて居ますから、直ぐに買ひとゝのへて送ります。

それだけならば、取次ぎ販賣店でも用は足りますが、取次販賣店と違ふ處は、買手の氣持ちになつて品物を選定することです。つまり、着物を買いたいと云ふ人があれば、ジユリアン孃の第一の仕事は、先づ、着物を着る當人に逢ふことです。逢つて見て、其の人に最もよくうつろう柄や色を選定します。もし、購客が地方に居る人ならば、寫眞に寸法を書き添へて送るのです。

着物なら着物、靴なら靴と云ふように

一種類の買物なら、それ〳〵の商店へ注文すれば、不滿足な點はあつても先づ用は足りますが、いろ〳〵なものを一通り揃へる場合に非常に重寶がられてゐます餘暇を少しも持たない職業婦人や公的生活をしてゐる婦人が旅行に出る場合ひ、又は、婚禮をする場合ひには實に好都合だと云はれてゐます。ブラウン夫人は急に地方へ講演に行くことになつて、衣服から其の他の身のまわりのものを一切新しく揃へなければならないと思ふ。併しさうしてゐる餘暇がない。其處で、ジユリアン孃の事務所へ電話をかける。すると、ジユリアン孃なり、又は、助手の一人が走せ付けて、ブラウン夫人の身丈だの容貌を見て行き、そして、衣服の柄、帽子、手提などの色の配合などを選定して、出發迄にはスッカリ揃へ、はな紙から靴下までも揃へて行つたと云ふことです。

婚禮の場合などには、いくら〳〵で一切を揃へて貰いたいと云へば其の金額の範圍内で、最上にていさいのよいものがあつめられます。自分で非常な暇をつぶしてぶきように買ひあつめるよりも、ねだんも安く、のみならず、其れを職業としてゐるのですから目がこへてゐて、色の配合なども、遙かにあざやかだと云はれてゐます。ジリアン孃は云つてゐます。

「私共の仕事のうちでは婚禮の仕度が一番大きい仕事ですが、其の次には獨身男子の買物です。こう云ふ方面にかけては

男子方は意氣地がないもので、一度などは、獨身の軍人さんが殆んど神經衰弱にかゝろうとしてゐました。と云ふのは彼は花婿の附添人になる役を引き受けさせられたのです。さう云ふ關係から、彼は花嫁に相當な贈物をしようと考へても、どう云ふものがいゝかさつぱり見當が付かないで三週間考へ通した上句、私共のことを聞いて依頼して來ました。私共は早速或る品物を選定して送り届けました其れが非常に花嫁に氣に入つたと云ふので其の軍人は喜んで、以來、彼は私共の友人として交際してゐます。本當に私共は獨身男子が友人や親類の娘さん達や夫人達に贈物をしようとする場合ひの最上な相談相手です。此の仕事を開業してから始めて大きな婚禮の仕事が來た時には私共は皆で興奮してしまひましたが、今では、もう、經驗がつんで居ますから、どんなものが來ても驚きません。赤子のお祝ひ物や婚禮物と、お葬式の贈物や仕度のものとを同日に買ひ歩くことなど度々あります。』と。

ジユリアン孃は毎日々々各商店を巡回して歩いてゐます。そして、何處にはどう云ふものがある。どこではどう云ふ新しいものを賣り出した、又、何處と何處では定價にどれだけの差がある、と云ふことを明細に調べてゐます。

一寸考へると何でもないようなことで實際には、これは、大仕事です。何處に何があるかは暗記して居なければならず

そして、二日かゝつて買ひあつめるものは一日で買ひとゝのへるように、又、一日かゝるものは二三時間ですますと云ふ風に時間を經濟的に使つて、組織的にことを運んで行くには、矢張り、相當の手腕を要します。

そして、收入は何處から得るかと云ふと、購客からではなく、商店から手數料を取ることになつてゐます。今では、もう何處の商店からも信用を受けて居て、晦日拂ひになつてゐます。晦日に支拂ふ莫大な金額のうちから手數料をとつてジユリアン孃は立派に事務所を支へて居るのです。

ですから、購客の方では、自分で商店へ行つて買ふのと同價格で、少しも暇をつぶさずに、しかも、最優良な自分に適當した品物が手に入るので、孃の仕事は大きくなるばかりだと云はれてゐます。

婦人の職業が善いにしろ、惡いにしろ現在の必要は婦人に職業を強いてゐますので、これから開拓し得る新方面を御紹介する意味で、これを書きました。

製造人と消費者の間にはさまる仲間人を出來るだけ少なくしようとする消費組合組織の運動が絶對に必要である、一方又こう云ふ新しい仲間人が有益であるのは、今日の複雜な社會は、到底、一筋繩で改革出來るものでないと云ふことの證據だろうと思ひます。



職業婦人と結婚

有利な職業を有つてゐる婦人が結婚をした時に其の職業を抛つべきかどうかと云ふことが問題になるならば、大抵の場合、人は職業を抛てることの不利益を高唱します。職業と家庭生活との調和は計り得るものであるのに、家庭の雑事は雇人でもことは濟むのに、其の家庭生活のために有利な職業を捨てることは愚なことだと申ます。

そして、これは普通の考へですが、併し特種の才能を有つた婦人の外は、一人の婦人が稼ぐ月給は一人の女中を置くならば差し引き何にも殘らないと云ふのは今日の一般の狀態です。其の上に自分の家、自分の家族を思ふ主婦の代りになるやうな女中はめつたにあるものではあり

ません。女中問題は今日の主婦にとつてはなか／＼厄介なものとなつてゐます。

結婚をして家庭を持つても、まだ、子供がない間は比較的問題は起りません。又相愛する夫婦ならば、二人の稼ぎで生計を立てる家庭内の仕事は夫婦で分擔するかも知れません。妻が食事ごしらへをすれば、夫が座敷掃除をすると云ふやうに。

けれども、今の男子には、其れが永久には續きません。新婚當時のもの珍らしい間こそ新妻と共に仕事をすることに興味を持つてゐる間こそ、家事にも手を出しますが、直きに其れはうるさいものとなります。そして、男は長い間の習慣をたてに、家事は女の手によつてのみ取り

運ばれるものであるかのやうな顏をするやうになります。女の方でも亦其れを止むを得ないことゝして默諾してしまひます。智力に於て、財力に於て、又、年齡に於て、自分よりは上の婦人を妻に持つた男ですらさうなのですから、普通一般の婦人を妻とした男子がさう云ふ態度になるのは、むしろ當然でありませう。

そして、夫婦が朝同じやうに家を出て夕方同じやうに疲勞して歸つて、夫はゆう／＼と新聞でも讀んだり煙草でも吸つたりしてゐる間に、妻は忙しく食事の用意をしなければなりません。ですから、結婚は男子のためには、温い、精力を養ふ安住所を造ることゝなつても、職業を持つてゐる婦人にとつては、非常に重い

負擔を負ふことになり、精力を消耗させることになります。

其の上に、子供が出來るならば、そして、これは普通の出來ごとですが、職業婦人の負擔がどんなものであるかは、私が敢へて云ふ必要はない位のものです。家事、育兒、職業と、婦人には三重の負擔がかゝつて來ます。獨身婦人の教師は漲つた活氣をもつて出校し、充分職務を盡してからゆう／＼歸つて行くに反して既婚婦人、殊に、子持ちの教師は、朝も後れがちなら、又、放校後もイライラして居て歸ることばかり考へてゐて困ると或る校長が云つたのを私は聞いたことがあります。

三重の負擔を負ふてゐる職業婦人の生活がどんなにみじめであるか、それが健康と幸福とにどんなに有害であるかは、結婚をした職業婦人自身は勿論のこと、醫者、婦人職業研究者、及び、社會學者が、皆、一樣に認めてゐます。

けれども、婦人の職業が善くても惡くても、現在の必要が多くの婦人を家庭の外に追ふので、職業婦人の數が日に月に增加して行くばかりです。又、現在の必要に迫られなくとも、夫に仕へる妻、父に仕へる娘の勞働が價値に踏まれないので、多くの婦人達が職業へ職業へと走つて行きます。家庭を外にして勞働に從事すれば、自分のものとして使へる金があるのに、同じやうに骨を折つて勞働しても家庭内の仕事をして居たのでは夫の、

又は父の情けで生活して居るのだと云ふことの屈辱に耐へられないと云ふやうなことを、多くの婦人は考へてゐます。

家庭内の仕事を價値に踏まないと云ふ習慣が多くの婦人を家庭の外に追ふのみならず、其の習慣が、又、職業婦人自身をも不利の位置に陥れてゐます。うちに働いて居れば一文にもならないのだと云ふ考へが、婦人をして安い賃銀に滿足せしめて居ますし、又、雇主の方でも、無賃で働いて居るのが習慣である婦人の賃銀は安くてもよいものだと考へて居ますそして、これは、獨力で生計を立てなければならない獨身の職業婦人のためには大きな邪魔物であることは世界一般が認めて居る事實です。

今日の處では、勞働婦人の問題と、一般婦人の問題とを別なものとして取り扱はうとしてゐる向きが或る一部の方面にありますが、併し、本當に有益な婦人運動は、父の、又は、夫のために家庭内で働いてゐる婦人の利益も、職業に從事して居る婦人の利益も、子供を抱へて居るので家庭外の勞働不能となつてゐる婦人の利益も考慮しての運動でなければ有効でありません。

其の點に氣付いて居る獨逸の婦人運動者達は有効な仕事をしました。夫の收入によつて生計を立てゝゐる妻達の利益に付て、常に考へてゐた婦人運動者達は、宣戰が布告されて、多くの男子が出征して家に殘つた妻達に政府から僅かの惠み金

が下つた時に、家庭婦人が其のやうな待遇を受けて居るうちは、全婦人の屈從の狀態は斷じて改良出來ないと云ふ理由の下に大々的に政府の其の態度に反抗しました。

又、工場勞働婦人が工場主に利用されて居ることは、勞働婦人自身の不幸ばかりでなく、由々しき社會問題であることを婦人運動者達は高調してゐます。終日工場內で働き、家庭へ歸つてからは、夜中迄も食事のことや、洗濯や、縫物やにかゝつて居ることは、婦人自身の健康に有害であるばかりでなく、民力の萎靡となること、勞働婦人の餘裕を計らねばならぬことを主張してゐます。

無產階級の子持ち婦人の經濟上の憐れな狀態は、國立母性保險によつて、或る程度迄の滿足を得てゐます。これは、全然夫の腕によりかゝつて居なければならないと云ふ意氣地のない狀態を幾分脫したわけになります。婦人が絕對服從の位置に陷れられた原因は、產褥にある間の弱い無抵抗な狀態にあつたことを思へばさう云ふ狀態にある婦人を政府が保護することは大いに意義がある。そして、これは今日の文明の皮肉だと云はれてゐます。

其れはとにかく、職業と結婚が兩立出來るかどうかと云ふことは今日の緊急問題の一ッであります。理想としては、勿論、一個人を兩途に行かしめることは出來ないのでありますが、今日の社會狀態に於ては、先づ、條件附きで、其れを肯定

しなければならないでせう。職業を持つてゐても居なくても大部分の婦人が結婚生活に入ります。血氣盛んな間に於てこそ、種々なことを考へて居ても結婚生活は大自然の命令だからであります。

無産階級の婦人にとつては職業を好くの嫌ひのと云つては居られない、又、一時凌ぎでもなくなつたので、歐米の勞働婦人組合は益々强固にならうとしてゐます。又、中流階級の娘達にも職業敎育の必要が認められてゐます。

いづれにしろ、結婚には必ず母性が伴ふものであり、母性の任務を全うしようとすれば、屋外勞働は不能となる。從つて經濟上の獨立が無くなると云ふのが現代職業婦人の大多數の惱みとなつて居るのですから、職業婦人と結婚問題は、職業と母性の問題に切りかへて考へなければならないものであります。

編輯の後

机にかじりついて一生懸命仕事をして居るとまるで、頭が泉源になつて、髮の中に小川が四五筋出來たかのように、汗が止度なくチヨロチヨロ流れるので、原稿を汚すまいとして其れをふくのが面倒くさい。けれども、やがて、呼吸が苦しくなつて、ホッ／＼と云ふ息づかいをして居るのに氣が付いて、『まア何と云ふ馬鹿々々しい暑さなのだろう。一體何度になつてゐるのだ。』と獨言しながら立つて寒暖計を見ると、九十九度！『成程れ』と又獨言しながら私は階下に下りて行きました。二階は亞鉛屋根がやけるので階下よりはいつも三四度溫度が上るのです。

本當に今年は暑う御座いました。けれども、あまり暑くて呼吸が苦しくなる迄も仕事に熱中し得る自分を私は喜んで居ます。日も猶足りない程忙しくて、いよ／＼呼吸が困難になる迄も暑さを忘れて居る程仕事を澤山持つことが最上な消夏法であると私は信じて居ます。皆様の御健勝を祈ります。

英國一周

山田嘉吉

六月十九日。太西洋上にて　太平洋を渡る時の太洋丸でさへ、其の大きいこと、乘り込んでゐる人數の多いこと、恰も、一植民地の觀があると書き送つて置いたが、此の太西洋を横斷するマジエステック號は其の大きさに於ては、實に、太洋丸の三倍則ち五萬六千噸の船である。これは、英國ホハイト・スター汽船會社所屬の船で世界第一の巨船である。英國から紐育へ初航海して來たのだ。それへ、自分達は便乘して英國へ行く。此の船は太西洋航路の定期船となつたのである。船の長さは九百五十六尺(二町半)幅百尺(十六間半)。であるから、甲板の遊歩場を四回廻つて歩くなら、それは一哩歩いたことになる。太洋丸の乘客は一〇〇一人であつたが、此のマジエステック號は四一〇〇〇人の乘客を容れることが出來る。そして、船員の數に一千人である。勿論、船の中は最高に美しく、整頓してゐるし、又、素晴らしく大きいために、少しの動揺も感じない。丁度地上のホテルの室に居るのと同じ氣持ちで居る。此の船は二十四時間に五百五十哩走るから、二十五ノットの速度を持つてゐるわけだ。前にも云つた通り、十七日に紐育を出帆したが二十三日には英國西海岸サウザンプトンに着す豫定である。船賃は五百六十圓だ。

六月二十三日。倫敦着。ヴイクトリア・ホテル投宿。我々の乘船マジエステック號は豫定の時間に四時間遲れて午後十時半、サウザンプトンに着いた。此の船はサウザンプトン港に入る前に佛蘭西港シエルブールに寄港するが、其處へ上陸する人々のために餘分

の時間が殺されて居るうちに、退潮時になつて出港不可能となつたのである。

サウザンプトンから約二十哩を特別列車で走り、ウオタルー驛着、倫敦に入る。

六月二十四日。ヴイクトリア・ホテルにて。文豪アーピングがあの輕快微妙な筆で描寫したウエスト・ミンスター寺院を見物した。倫敦に入つて見ると、人も土地も、米國よりは眞面目で、落着いて居る。實に米國人は夢を見て居るかのようだ。

婦人に付て云ふなら、紐育婦人よりも倫敦婦人の方が遙かに嚴肅な様子をしてゐる。其の態度はより眞面目で、より親切である。そして、英國婦人は米國婦人程、社會に向つて大聲を擧げはしないが、併し其の割合ひにより多くの仕事をしてゐる。

物價は日本よりも米國及び英國の方が安いように聞いたが、決してそんなことはない。むしろ、高い位ひだ。最も中には安いものも無くはないが、併し其れはほんの僅かで何にもなりはしない。

英國に二週間、歐洲に一ヶ月費して、そして、八月十三日にマルセイユから新嘉坡行きの船に乗る豫定だ。

六月二十五日。ヴイクトリア・ホテルにて。今日は日曜の倫敦を見物した。日曜の朝の倫敦は非常に靜謐である。何故なら、倫敦市の諸商店は日曜日には皆休業してゐるし、市民は、皆ゆつくり、休んで居るから。けれども、午後になると、凡ての公園、凡ての路傍は、人々で一杯になる。

私達は、午前十一時から午後八時半迄自動車を飛ばして倫敦市中を縦横に見物して歩いた。私達はウインザー・キャッスルを見た。これは十六世紀に建築されたものであるから、隨分、古風な建物だ。封建時代を彷彿せしめてゐる。とにかく、不思議な氣持ちのする建物だ。私達は、又、テームス川を溯ふて走つたが、實に、此の川は美麗であると同時に、莊重な感じを起さしむる。

陸軍元帥サー・ヘンリー・ウイルソンがアイリシ人に暗殺されたことは、全英國民を哀傷せしめてゐる。もう、一つの凶事は獨逸に於て、外相ラテナウが政

處に斬殺されたことだ。

六月二十九日。ヴイクトリア・ホテルにて。セント・ポール大伽藍を見た。新教の凡ての教會のうちで、一番大きな、一番莊嚴な、又、近代に於て、最も著名なる建築物である。建物の長さ四百九十尺ある。内部の會堂の幅は九十四尺、會堂外陣は二百四十尺、丸屋根の内部は直徑百〇八尺、高さは二百十六尺、外部は頂上迄では三百七十尺あると云ふことである。

此處は、多くの英雄や、著名な人物の埋葬地になつてゐて、それ等の大人物の記念碑が此の大伽藍の内部を飾つてゐる。多くの有名な人々の中にネルソンだの、ウエリングトンなどの記念碑がある。又、過去に於て、幾多の大悲劇が演ぜられた倫敦塔、たとへば、王、女王、多くの志士、愛國家、宗教家などが幽閉されたり、斬殺されたりした、其の倫敦塔も見た。國立美術館では世界的に有名な繪畫の數々を見た。大英國博物館では古代のものが珍しかつた。

七月一日。スコツトランド、エデインバラ着。ノース・ブリテシ・ステーション・ホテル投宿。今日午後一時三十分に倫敦を立つて、午後九時五十分當地に着した。殆んど、始終海岸を走つて居たので、實に、愉快であつた。最も變な氣持ちがすることは、午後十時であるのに、まだ、太陽が高い處に居ることだ。明日は此の市中を見物して、明後日は、スコツトランドの名所古跡、又は、世界的に有名な絶景の場所を通つてグラスゴーに出て、其處から、リヴアプール、マンチエスター、プレストンへ行つて、それから、再び、倫敦へ歸へり、佛蘭西に向ふつもりで居る。

此のエデインバラはスコツトランドの京都とも云ふべき處だ。非常に、清潔で、繪を見るようで、不潔な個所は何處にも見へない。

七月二日。ノース・ブリテシ・ステーション・ホテルにて。此のホテルは非常に美しく、そして非常に靜かだ。殊に、今日は日曜日であるので餘計に靜かだ。日曜日には午前十時迄電車は運轉しない。エデインバラ市中の家屋は、重々しく、暗く、まるで、城閣を見るようだ。事實に於て、又、多くの古城が市内

の此處彼處に見ゆる。今朝は自動車を走らせて、エデインバラ城、ローヤル・マイル、ホーリーロード、エデインバラ大學の新舊の兩方、クレーグミラー城フオース・ブリツジ、ローリン城、ローリン禮拜堂、スオンストン（ロバート・ルイス・スチヴエンソンの家）等を見た。經濟學の開祖アダム・スミスの誕生地と墓地、詩人ロバート・バーンが一度住んで居た家も參觀した。其れ等は、皆、非常に單純なものだが併し、興味の深いものである。

七月三日。エデインバラを出立してカランダーへ行つた。其處にあの有名なスターリング城があるのだ。文豪スコツトの傑作「湖上の美人」のうちに現れて來るあの城が。其處から又、自動車でツロサツクに行き、ツロサツクホテルに入つた。此處も、亦、「湖上の美人」のうちにあざやかに現れてゐる處だ。湖上の美人エレンが船を浮べて居たキヤトリン湖の沿岸を通つた。ジエームスとロデリツクが一騎打ちをした個所もラモンド湖、ヴエンヴエニユー山、エレンの島、其の外、「湖上の美人」のうちにいみじくも描かれてある數々の絕景を見た。スコツトの立派な記念碑も見た。エデインバラがスコツトランドの京都なら、此のツロサツクはスコツトランドの日光であり箱根である。

七月四日。グラスゴー着。クレーアモント・ホテル投宿。グラスゴーの造船製鐵業の盛んなのには驚く。クライド川を沿ふて十哩間は凡て造船所である。當地の大學を始め、博物館、植物園。其の他有名な場所は皆見て步いた。

七月六日。リバプール着。ミドランド・アデイルフイ・ホテル投宿。五日にグラスゴーを立つて、紡織綿布、絹布業の大中心地として知られてゐるマンチエスターに向つた。けれども、マンチエースターに着いた時には、天候が險惡であつて、繪端書一枚買ふことも出來なかつた。其の上に、ホテルを得ることが出來なくて非常な困難をした。實は、マンチエスターに向ふ途中、其處で第一等の旅館、ミドランドホテルへ電報を打つて置いた。部屋を保存して置くように。けれども、行つて見ると保存してなかつた。

と云ふのは、生憎、化學者大會が其處で開かれたゝめに旅館は滿員であつたのだ。止むを得ず、第二流の旅館へ投宿した處が、其處には書簡用紙がなかつた。其のためにマンチエスターからは手紙を出すことも出來なかつた。

けれども、今夜の、此のミドランド・アデイルフイホテルは立派だ。マンチエスターのミドランド・ホテルも此のホテルも同じ人の手に屬するものだ。そして、これは、此のリバプールで最上のホテルなのだ。建物の石材は、皆、大理石だ。ホテルだと云はれずに此のホテルの室内に導き入れられるなら、誰でもこれをホテルだと思ふものはないだらう。其のかはり、何かが高いことも素敵だ。食事の價を云つて見よう。さうすると外のことが想像出來るだらう。私達の食べた夕食は、スープの外に三品、それにデザートとコーフイーで二十四圓とられた。

七月七日。再び倫敦だ。ヴイクトリア・ホテルへ歸つた。

七月十日。ヴイクトリア・ホテルにて。今日は朝八時に倫敦を立つて、ストラトフオードへシエキスピーアの家、及び、シエキスピーアの記念物を見に行つた。それは倫敦から百哩離れた處にあるのだ。シエキスピーアの妻が住んで居たといふ部屋も見た。何もかもが隨分古いので、一切が維持者の手によつて保存されてあるのだ。到底、詳細は書き盡せないから、歸朝してから、ゆつくり話すことにする。午後六時にヴイクトリア・ホテルへ歸つて來た。明朝十時五十分倫敦發の汽車で巴里に行く。此の次の手紙は佛蘭西から書く。

今、英國の氣候は非常に不順で、日本の梅雨期のような氣持ちがする。冬服に薄い外套を着てゐて丁度いゝ位ひである。



歸省

原田琴子

ゆみ子がたつた一人で寂しい故郷の停車場へ降りた時、もう日はトップリ暮れて居た。別に何時歸るといふ葉書も出して置かなかつたので、迎ひの來て居る筈はないと承知して居ながらも、薄暗い燈火のかげにポンヤリ佇んでゐる人々の顏を一人々々に見渡さずには、ゆみ子は外へ出られなかつた、そして何處やらに見覺えのあるやうな顏が二つ三つ眼の前をかすめはしたものゝいつも改札口のすぐ側に腰を曲げて立つて居る平助爺の姿が見えないのを知ると、すぐさつ/\と暗い野路へ歩き出した。兩方の手にさげた手荷物がひどく重いのに氣を取られて、物かげのない田圃の寒さも左程に感じられなかつた。

ものゝ半町程も行くと左右疎らに數戸の百姓屋があつて、紅い懷かしい居爐火が戸の隙間からチロ/\洩れて見え、氣のせゐか人々の話し聲も低く耳に入つて來る。

「田舍はやつぱり靜かなのだ、いつ來ても同じ樣に――」

と思はず獨り言を云ひ/\ゆみ子はやがて横町を折れて、や、明るい通りへ出た、そこからは、ゆ



み子の家の軒燈が、小さく向ふの方に見えた。

まだ暮れて間もないのだけれど、寒いせゐからか商家の店さへも戸が閉され、星明りと乏しい軒燈に照された淋しい街には、人通りも少なかつた。ゆみ子と一緒に汽車を降りた二三の人々は、足早なゆみ子一人を殘して、とつくに何處へか消え去つて、もう影も見えなかつた。

ゆみ子は別に急ぎもせず、ゆつくりと歩いて行つた。かうしてひつそりとした故郷の町をただ一人、しかもしめやかな夜に歩くといふ事が、特に自分だけに與へられた幸福であるやうに思はれた。何となしの懷かしさ、夢のやうな想ひ出の樂しさ、ゆみ子はしみ〴〵それを味はうとして、久し振りに兩親や祖母の顏を見るといふ喜びをも忘れてゐた。

ふとゆみ子はうす暗い町の上を、一つの小さな人影が、此方へ進んで來るのを見た。近づくにつれてそれは、子供を負つた少女の姿であることが分つた。そして幽かな唄ふ聲も聞えて來た。それはゆみ子の耳に何處やら聞き覺えのあるものであつた。輕い心の動搖を覺え乍らゆみ子は、殆ど衝動的に足を速めようと努力した。そして互ひに近づいて通りすがらうとすると、思はず頭を延してゆみ子は、その負はれた子の顏を覗き込んで見た、途端に子供は

「おゆみ姉さん――おゆみ姉さんだツ」



と叫んでキヤツ〳〵と騒ぎながら兩手を振つて、子供に特有のうれしげな挨拶をした。

「きいちやんかい、もふ泊りに行くの、姉さんは――」

ゆみ子は突差にかう訊くともなく云つて、うす灯（あか）りを受けた顔に、ほゝえんで見せた。

「姉さんお家に起きてら、おゆみ姉さん、今夜泊るけ――ちやあした一緒に遊んで、ね――」

「あゝ、あゝ、明日ね、あしたお土産をあげるからね、おふみさんと行つておやすみ、きいちやんは大變肥つたこと――」

右手に持つた風呂敷包みを左手に渡して、ゆみ子は手をさしのべて、丸々と肥えくびれた幼ない手首を輕く、痛くない程度に握つた、そして血の流れの温かみを感じると同時に、雪のやうな哀愁が心にかゝるのを覺えた、小さな從妹きく子――ゆみ子の叔母が臨終の際にいかにしても執着を斷ち得なかつたその末の娘――生れながら人見ずで、知らぬ人の顔さへ見ればおびえてべそをかく僻の子供、つひこの前來た時までいくらすかしても傍へも寄らなかつた子供が、今夜は如何したといふのであらう。

「きいちやんは大層好い子になつたぢやあないの、おふみさん」

「えゝ」



さおふみさんは微笑して心持頭を下げた、そして『お休みなさい』を口の中でつぶやいてまたカラコロと歩き出した。暫らくの間じつとその後影を見送りながら、歩き出す氣にもなれずたゝずんでゐるゆみ子の耳に、また單調な低い唄の聲が聞えた。

『あゝして他人の手で育てられて、あの子はどんなになるのだらう！』

ゆみ子は小さい從妹の運命をいとをしむ思ひに心を亂されて、思はずほつと吐息をついた。

靜かな離れの六疊に、温かな床についてからも、ゆみ子はなか／＼寢つけなかつた。體はかなり疲れてゐるにも拘らず、安らかに眠りに入ることが出來なかつた。久し振りの歸宅、兩親や祖母の歡待、新鮮な魚肉や野菜のたべ物、とりとめのない氣のおけない雜談、そしてこの懷かしい幼馴染の六疊の室――すべてがコムフオタブルである筈であるのに、何故か心は落つけなかつた、澄み切つた意識の底から一條の煙が立ち揚つて、やがてはそれが全精神に擴がるやうに覺えた。

幾度も寢返りをした後に、ゆみ子は、大きくじつと目を見開いて、室の中を眺めた。壁際の簞笥や鏡臺から、窓に向つてあまりにキチンと取片づけられた机や本箱の方へ、眼は無心に注がれた。小さな床にかけられた鷄のかけじから花のない花瓶に至るまでがこの前歸つた時と變つては居なか



つた。然しゆみ子の心は、室の調度などについて何の感じも起らなかつた。ゆみ子にはまた涙が湧いた。一つの熱い塊りが胸の裡で融けて、次第に體中に滲むやうな氣がするのだつた。

死んだ叔母、思つても思つても惜しかつた。あの好きな叔母――叔母を惜ふ思ひでゆみ子の心はやがて一杯になるのだつた。

どんなにか叔母は死にたくなかつたのであらう！　左樣思ふとゆみ子は、堪へられず惱ましかつた、明らかな死を豫感しながらも叔母は死を厭ひ嫌つてゐた。それは七十を越した生みの母……ゆみ子の祖母と、まだ幼ない五人の子供等の上にかゝる執着ゆえであつた。

「この年寄と厄介を殘してゆくと思ふと……」

ほろ〳〵涙をこぼし乍ら、子供のやうに聲を立てゝ泣くと、紅をさしたかと思はれるほど赫い頰の、角ばつた骨や、襟のはだかつた胸に一本々々に數へられる肋骨が、がた〳〵と顫ひ出して、熱いぬら〳〵した涙が止度もなく枕の上に流れる、と忽ち激しい咳の發作が起つて、息も絕えんばかりにヒイ〳〵喫き入つて來る……かういふ光景のいくつかは、ゆみ子の記憶にまだまざ〳〵と殘つてゐる。

ゆみ子は、然し、腸み裂かれるやうな思ひをしながらも、そのあはれな叔母を慰める一言の言葉



も口へ出なかつた、默つてただ眺めてゐる外はなかつた。「子供恐いことは私が引き受けます、御安心なさい――」かういふ言葉が口元までは來はしても、自分が年こそ二十歳を越してはゐるが、誰からも子供と同じに見られ扱はれてゐることを思ふと、思ひきつて聲に出せなかつた。そして坐にゐる誰か他の人に――母や東京の叔母に――眞心からそれを云つて貰ひたかつた。すれば叔母はいくらか安心されるであらう――がゆみ子のこの期待は、不幸にも充されなかつた。

『そんな弱い氣を出さずに養生して――』

母や東京の叔母は、かういふ見えすいた慰めしか云はなかつた。

子供の時分からゆみ子は、不思議にその叔母になついてゐた。一族の中で最も多くの明るい理解力と温かい同情を持つてゐる叔母であると、深く思ひ込んでゐた。深い知識こそなけれ、思慮のたしかな、利己的感情から離れた人であると、固く信じてゐた。

ゆみ子の眼に映つた叔母は、女であるがために空しい一生を終つた、不幸な人であつた。生れ付き勝氣だつた叔母は、小學校に居た頃から、丁度その當時流行した、自由獨立の思潮に動かされて激しい功名の念に憧れたといふことであつた。うら若い叔母は密かに遊學の望を懷いてゐた。然しこの地方の多くの人達と同じ樣に「女の子は早く嫁にやるもの」と信じきつてゐる親達は、それを



許さなかつた、そして十八歳の春には叔母は、同じ村の緣つゞきの家へ、貰はれて行かれねばならなかつた。そしてそれからの生活に、よいことは少しもなかつた。

叔母の良人に當る人は養子なのであつた、姑になる人は二十歳代から後家を通して、行末な樂しんでゐた息子に丁年になつてから死なれた、不偶な人であつた。そんな事情で家の中は、とかく澁しく暗かつた。嫁にゆくその日まで良人になる人の顏を知らなかつた叔母に、追々良人の氣心が分つて來る時分は、長年獨りで暮した姑の嫉妬がソロ〳〵芽を出してゐた。姑は自分の血を引いてゐる叔母を愛しはしたものゝ、それだけにまた遠慮がなくて我儘を出しもした。一寸の茶飲話にも森針を射すやうないやみを云ふ事を忘れなかつた。

叔母の家の商賣は、荒物屋であつた。田舍の荒物屋と云へば、日用品のすべてから食糧品や小布れ類までも小賣りに賣り捌くので、ずいぶんと面倒な、しかも割合に利の薄い職業であつた。骨の折れる割に商賣のまうけは少なかつた。家のうしろの小さな野菜畠の外に別段不動産といふものはないので、叔母夫婦はいはゆる腕一つで稼がなければならない境遇なのであつた。でも叔母はそんなことを苦にはしなかつた、負けぬ氣性の叔母は、どんなにでも働らいて家を興して見せると、雄々しい覺悟をしたといふ事であつた。然しいざ實際に當つてみると萬事に思ふに任せなかつた、嫁



に行つたその年の冬冷えこんだのがもとで、叔母は惡性のリウマチスを惹き起した、そしてその意地わるい病氣は、その後ながい年月の間に五人の子供を生んでから、肺を冒されて二年越し床についた後、骸骨のやうに痩せ衰へて死んで行くまで。叔母の體を蝕んだのであつた。

然し、恐らく叔母にとつて一番辛かつたのは、その姑でもその難病でもなかつた、その良人の性格の缺陷から來る所業であつた。叔母の良人は、決して不人情な人ではなかつた、なまけ者といふでもなかつた。寧ろ調子のいゝ働らき者であつた。人の世話を喜んでする義侠心も持つてゐた。がただ一つ――素行がおさまらぬのが缺點であつた。そして妻としての叔母の生涯の苦惱は、その一點にかかつてゐたのであつた。

酒の上で女を買ふ――さういふ所業はごくありふれた平凡な事であるのかもしれない、男としては却て當り前の事であるやうにこの田舍の人達は思つてゐる――けれども叔母にとつては、良人の品行の正しくないといふことが、一生を貫いての恨みであり、恥辱であり、苦惱なのであつた。結婚後の叔母は決して富貴や名聞を求めはしなかつた、ただ一つ求めた愛――それはあはれにも與へられなかつた。さうして叔母は、良人に對する信頼を懷き得なかつた。『頼りない人』かう　ふ觀念は、重病に惱む叔母の心をどれほど寂しく、堪へがたくしたことであらう！　そして子供達の行末



がどんなに不安に思へたことであらう！

それを思ふとゆみ子は、熱湯を飲むやうな思ひがするのであつた。

叔母の死んだ當坐ゆみ子は、さほどに寂寥を感じなかつた。とても恢復せぬものと久しい前から諦めてゐたせゐか、冷たくなつた叔母の遺骸を眼前に見ても、別に涙は出なかつた、親戚や近所の人達が仰々しく述べる悔みの言葉、それに對する反感が、悲しみを制へもした、叔母の亡骸の傍に石のやうに固く坐つたまゝ、ゆみ子はじつと目を閉ぢて、あまりに騒々しい現實から離れようとした。ゆみ子はたつた一人靜かに叔母を悼みたかつた。

東京へ歸つてからは何といつても忙しいその日〳〵に紛れて、つひ叔母の死んだといふ事は忘れてゐたり、時には叔母はやつぱり郷里に暮してゐるものゝやうに思ひもした、が二月三月と日が經つうちに何かの折にふれて――夕暮の街を急いで歩く時、ふと明るいお菓子屋の店先きが眼に映つたやうな場合――叔母は甘いお菓子が好きだつた――劇場で休憩時間に廊下へ出て冷たい夜の空を仰ぎ見たやうな時――叔母は芝居を觀ることが好きだつた――には刺されるやうな胸の痛みを覺えて、深い悲愁にゆみ子の心は閉された。何か嬉しいことのあつた場合は、もし叔母が生きてゐたならどんなに喜んでくれたらうにと思つて、やるせなく寂しかつた。月日が經てば經つほどゆみ子は



却て叔母を忘れ難くなるのだつた。

ゆみ子のこの叔母を慕ふ心は、然し、ただ悲しみの淵をさまよふまゝではすまなかつた。ゆみ子の眼は自からまだ幼ない從妹達の方へ注がれて行つた。母親を喪つた幼ない子供達！　それは限りもなく憐れに思はれたばかりでなく、その子供達の行末に對して自分が何か重い責任を負うてゐる者のやうに感じられたのであつた。もとよりゆみ子は叔母に、あと／＼の子供の事なぞ托されたのではなかつた。然し叔母と自分とがどんなに親しい間柄であつたかが忘れられないと同時に、ゆみ子は、從妹達に對して無關心になることが出來なかつた。

「だが私に何が出來るだらう！」

けれども一家における自分の位置、力といふやうなものを思ひ廻した時、ゆみ子はかう我身を顧みずには居られなかつた。少くとも現在差し當つては、派出になつた自分の蓄財でも從妹達に贈つてやる外に、形に現はれた助力は爲し得ないのであつた、否、それさへもまづ母に相談してからでなければ、ゆみ子の心任せにはならないのであつた。

「そんなに皆やつてしまつて、お前どうするのだえあとを」

家へ歸る度に藏の簞笥から何かと探し出して來ては、「これを初子にやらうと思ふんですけれど」



など、云ふゆみ子に、母はかう不服らしい顔をしてみせる事もあつた。

死んだ叔母のために從妹達につくさうといふ欲ひ——ゆみ子の心はこの欲ひに燃えてゐた、しかもそのために苦しかつた。從妹達の幸福が一面に神の手に運命の上にかゝつてゐるものと思ひ得たならば、或ひはより平靜で居られたかもしれなかつたけれど、然しゆみ子には左様と思ひきれなかつた。この世の中に自分自身よりもより强い權威を以つて、從妹達の幸福を支配し得る者のあることを、ゆみ子は拒み得なかつた。その人に較べてはなんといふみじめな位置にある自分だらうか。自分はあの從妹達の家に對しては何の口出しをする權能も持つては居ないのだ！　さう思ふとゆみ子の心は悲しかつた。

「せめて私の妹であつたなら……」

ゆみ子は甲斐もなくこんなことを思ひもした。

叔母の死後一層强い愛着を從妹達の上に繋ぎながら、しかもゆみ子には、その從妹達が今までよりもずつと遠い、自分から離れたところに隔つてしまつたやうに思はれた。ゆみ子はよく叔母と從妹達の敎育上の事について話しあつたものであつた、が今では誰とそんな話をしよう！　叔父に對してはこれまでよりも一層深い遠慮が感じられた。



ゆみ子は、叔父に對しては、自分ながら不思議なまでに、叔母の死についての同情を持てなかつた、叔父がその妻の死を深く悲しんでゐるであらうとは、ゆみ子に想像されなかつた。却て叔父は長年患ひがちで殊にこの四五年は起居にも不自由勝だつた叔母の死に依て一つの重荷が下りたやうにでも何かから釋放されたやうにでも思つて居はしまいかと疑られた、叔母の死の前後に於ける叔父の態度や言葉から左樣思へたのであつた。

さうしてゆみ子は、叔母を憶ふ自分の純粹な感情の中に、この世の中の濁りが浸み入つて行くやうにも感じられた。

悲しんでも〳〵足りない歎き！　けれどもその底には温かい慰ひがあり、淸い涙の泉が流れてゐる、そしてその悲しみは、人間の心を洗ひ淸めるものである。靜かな深い――これまで知らなかつた境地へと導くものである。深い哀愁の中から人生のある意義をつかまうとすることに、ゆみ子は決して失望しなかつた、ゆみ子にとつては死んだ叔母が、生きて居た時の幾倍か、なつかしく戀しく、そして自分に接近してゐるやうに思へた、そしてある感謝に似た心持さへ湧き出づるのであつた。ゆみ子は自分ひとりの心の奧深く閉ぢこもつて居たかつた。けれどもそれは出來なかつた。殘された叔母の子供達に對する愛府が、現實のあらゆる世俗的な事柄にも鋭い眼を向けさせたのであ



つた。叔父の心を色々に想像して見たり、親戚の人々のおもはくについて考へて見たりすることをゆみ子は止められなかつた、そしてそのために心を惱まされつゞけてゐた。

格別の用事もないのにゆみ子が、二三泊のつもりで不意に郷里へ歸つたのも、遠く離れてゐていろ／＼な臆測をすることに、堪へきれなくなつたあまりであつた。ゆみ子は久々で從妹達の様子が見たかつた、またその後の叔父の家庭の具合も知りたかつた、心の中の何者かに追ひ立てられるやうにして、ゆみ子はやつて來た。そしてやゝ遅れた夕飯の食卓に向つて箸をとりながらにも、傍でお土産のお菓子などを廣げてお茶を飲む母や祖母の談片から何かを知らうとして、氣を許さなかつた。

「何しろ一日も早えがいゝ、早く貰つてやんれえちやあ……」

ふとかう云つた祖母の言葉に、ゆみ子は思はず箸の手を休めたほど、愕然とした。

それは今更の問題でもなかつた、叔母の死と同時に――否遠からず死ぬべき者であると定まると同時に、その問題が周圍の人々の心に動いてゐた、ゆみ子はそれを知らないではなかつた、郷里の人々がその問題について極めて單純な意見しか持つてゐないこと、つまり叔母の死んだあとへは當然後妻を貰ふべきものと思ひきめて怪しまぬことを知らないではなかつた。この地方の風習からす



れば、それは、ごく〳〵正當な、道德的な事であつた。然し若くて卒直なゆみ子の心に、全然それを納得し得なかつた。後妻、繼母！　さう思ふのさへ限りなく厭はしく、汚はしく思はれた。もし叔父が叔母を本當に愛して居たのであつたなら、決して第二の妻を迎へようとはせぬであらう。幼ない子供達の世話や、家計を取締る上に、困るとは云つても、それらはまだ〳〵方法のないことはない。……

「私だつてはあこんな年とつて子供の世話なんか出來無えだし、店もあんな忙しい商賣だから、早くあとをきめれえぢやあ」

何かにつけて眞先きにかう云ひ出したのは、ゆみ子の祖母であつた。その祖母の心持はゆみ子にも察しられた。叔父へ對する義理さして誰よりも自分が左様云ひ出さればならぬものと、昔風な義理に固まつてゐる祖母は思ふのであつた。

だが、何故その必要があるといふのか？　かう考へた時、ゆみ子は不思儀に愕然とするのであつた、祖母の云ふ理由はほんの表面の口實にすぎない、恐らく祖母の心とてもそれを肯定してゐるであらう。では……そこにはゆみ子にとつては閉された門の彼方に横はつてゐる性の問題があつた。



ゆみ子にとつては性の問題は、まるで不可解であつた。然しとにかくに若いゆみ子が机の上で建てた理想からすれば、精神と肉體とは、一致せねばならぬものであつた、一つの精神を持つ人間が二人に肉體を分つといふのは純粹でないと思はれた。一體後妻を貰つた後にも死んだ妻を思ひ出さぬといふ事があるだらうが？　そしてそれは後妻に對して甚だしくすまぬことではないか？　こんな風にもゆみ子は考へた。けれどもゆみ子のこの考へ樣は、叔父に對しては、全くあてはまらぬとのであつた。叔父は叔母の生きてゐた時からすでに貞操を失つてゐたのであつたから……

「松や（といふのは叔母の家の居候であつた）ではどうして？　皆丈夫ですか、子供達は？」

ゆみ子はさり氣なく母に向ってかう訊いた。

「あゝ丈夫だとも、きくちやんはいゝあんばいに××の人達によく馴れて、毎晩泊りに行くしね、……まだなんにも分らないやうだねあの子は」

と母は云つた。

「××の家でだつて大變だよ、いつまであすこの厄介にもなつて居られねえ、でもまあこれで安心だ、やつと話がきまつただから……」祖母は誰にともなく、獨り言のやうにかう云つて一口お茶を飲んだ。



左樣いふ祖母の口ぶりから、ゆみ子にはもう訊かないでも、そのあらましが分つてゐた。

「それにしてもあんまり早すぎる、まだ半年にしかならないもの」

ふと口まで出かゝつたこの言葉を、ゆみ子は辛うじて噛み殺した。

ゆみ子は自分の感情をそのまゝ母や祖母に洩らす氣にはなれなかつた。また來ることにきまつたらしい第二の叔母の素性なぞを、聞いて見ようとも思へなかつた。ゆみ子はあまり口數をきかなかつた、そして疲れたからと云つて早く床をとつて貰つたのであつた。

「繼母、第二の母、あの子供達の……」

眠られないゆみ子の頭には、ただこの事ばかりがぐる／＼と渦を卷いてゐた。

子供達のためにこれは屹度幸福ではあるまい、否叔父のため、また繼母その人のためにも——

繼母がよい人であればある程一層事態は面倒になるであらう。

なぜ、なぜ叔母は死んだのか……

叔母の魂は今どんな心持で子供等の上にさ迷つてゐるだらうか！

熱い涙が枕を濡らすのを、ゆみ子は感じた。

——（續く）——

本誌定價表

一册	六册	十二册
金二十五錢	前金 金壹圓四十錢	前金 金貳圓七十錢
送料五厘	（送料共）	（送料共）

本誌代及郵税は前金の事〓御送金の際は振替貯金東京九三六八八番に御拂込みのこと〓郵券代用は五厘切手にて一割増〓廣告は御照會次第御相談いたします

大正十一年八月二十三日印刷納本
大正十一年九月一日發行

東京四谷區南伊賀町四一
編輯兼發行人　山田嘉吉

東京神田區仲猿樂町十七
印刷人　大杉直次郎

發行所　婦人と新社會社
東京四谷區南伊賀町四一
振替東京五三六八八

大正十一年九月一日發行 大正

